

提言

# ＪＡとフードバンクによる食を通じた積極的な連携を




**米山 廣明**

ＮＰＯ法人 全国フードバンク推進協議会　代表理事

よねやま・ひろあき／1983年山梨県生まれ。2008年設立のフードバンク山梨で、フードバンク活動に携わりながら、生活に困窮する人たちに農作業を通じて就労意欲や社会参加を促してきた。2015年11月の全国フードバンク推進協議会設立時から事務局長、2022年1月から現職。フードバンク団体の立ち上げ支援や育成、企業との連携促進、中央官庁や国会議員に対する政策提言活動に取り組む。

**「明日の食事に困る人のいない社会をつくる」をビジョンに掲げる、全国フードバンク推進協議会は、各地のフードバンク団体の支援や寄贈食品のマッチング、政策提言・調査研究などを行っている。代表理事の米山さんは、食を通じた活動によって、人と人のつながりができ、地域課題に取り組む人を増やすことができると話す。食料を供給するＪＡと必要な人へ分配するフードバンクとの連携に大きな期待を寄せている。**

## 生活に困窮する人の支援から

私はもともと、母が立ち上げたフードバンク山梨で、ボランティアとして活動を始めました。その後、スタッフとして雇用され、生活に困窮する方への相談支援にも携わりました。畑での農作業を通じた自立支援や就労支援も行い、生活保護を受けている方やホームレスの方といっしょに耕作放棄地を耕し、野菜や花を植えたり、お米を作ったり。就労意欲がでてきた人には、ハローワークに同行することもありました。

そうした活動を通じて強く感じたのは、生活に困窮している方の多くが孤立し



企業・団体から寄付された商品の仕分け作業には多くのボランティアも活躍

ているということです。家族・親族とのつながりがなく、「助けて」と言える人がいない人も。困窮している方が前向きになり、自分で仕事を探して就職していく過程を見ていると、人と人とのつながりを通して元気になっていくことがほんとうに多いんです。社会参加の場ができ、人とのつながりが生まれるだけで、人生を前向きに考えられるようになるのだと思います。

さらに活動を通して、貧困はその人だけの問題ではなく、生まれ育った環境が大きく影響していることも感じました。私自身、若いころは自由な生き方をしていましたが、それでも生活できたのは家族があって、恵まれた環境であったからです。一方で、中学校を出てすぐ社会に出なければならず、十分な準備期間も、スキルを教えてもらう機会もないまま社会に放り出された人もいました。私も環境が違えば、困窮する側だったかもしれません。その人の問題ではなく、環境の問題なのだと思います。

## 現在のフードバンクが抱える課題

コロナ禍以降、フードバンクを取り巻く状況は大きく変わりました。コロナ禍では、とくに飲食業などのサービス業が大きなダメージを受け、そこで働く割合の高かった女性をはじめ、仕事を失った方からの支援要請が一時的にものすごく増えました。それ以前から貧困問題は恒常的な社会課題でしたが、コロナ禍でより一層悪化しました。そして、こんどは物価高が続く厳しい現状にあります。

多くの人の収入があまり変わらないなかで、食費、ガソリン代、電気代など、生活にかかるほとんどの費用が上がっています。もともと余裕がなかった世帯ほど影響は深刻です。私たちの調査でも、８４％のフードバンク団体が、行政や社会福祉協議会を通じた生活困窮世帯からの支援要請が増えていると回答しています。

一方で、食品の寄付は伸びていないどころか、減ってきています。ここ1、2年はお米の高騰の影響も大きく、一般家庭や農家からのお米の寄付が激減しまし

た。また、ＡＩの進歩などで企業の需給予測が正確になり、余剰在庫そのものが減っています。食品ロスを削減するという観点ではよいことですが、余剰在庫から寄付を受けてきたフードバンクにとっては影響があります。物流費の値上がりもあり、企業が同じ量を寄付するにも以前よりコストがかかるようになりました。ニーズは増えているのに供給は減っている、需給のバランスが崩れてしまっているのが現在の大きな課題です。

## 各地のフードバンク団体の底上げをはかる

子どもの貧困も深刻です。夏休みや冬休みになると給食がなくなり、十分な食事がとれない。クリスマスプレゼントをもらったことがない子どもや、親戚からもらったお年玉でお米を買わなければならなかった家庭もあります。こうした貧困は、生活だけではなく、子どもたちの自己肯定感や自尊感情にも影響します。実際、フードバンク山梨で行った調査でも、自己肯定感の低さや学習の遅れ、いじめのターゲットになりやすいといった傾向が明らかになりました。

現在、私は直接受益者を支援するというより、各地域のフードバンク団体を支援する中間支援の立場にいます。私たちのビジョンは、「明日の食事に困る人のいない社会をつくる」ことです。そのためには、それぞれの地域のフードバンクが成長し、食の支援を必要とする人が必要な食品にアクセスできる環境を全国につくっていかなければなりません。

地域によってはフードバンクが近くになかったり、団体があっても食品の取り扱い量が少なかったりします。情報やノウハウ、食品の確保にも地域差があります。そこで私たちは、食品のマッチングや研修会などを通じて、地域間、団体間の格差を埋め、全国的な底上げをはかっています。平時からフードバンクの基盤を強くしておくことは、災害時の支援という面でも非常に重要です。



全国フードバンク推進協議会のウエブサイトは
コチラから

## ＪＡとの連携でセーフティーネット構築を

食と農を軸にしたＪＡには、全国の地域に根ざしたネットワークがあります。これは大きな強みだと思っています。フードドライブなどを通じて食品を提供していただくことはもちろんですが、ＪＡの取り組みをきっかけに、フードバンクや食品ロス、貧困問題を知る人が増え、その解決に参加し、賛同してくれる人が

増えていく。そこに大きな意義があると思います。

これからフードドライブを始めたいときは、まず地域のフードバンクに問い合わせて、相談してみてください。いきなり大きな規模で始める必要はありません。小規模でも無理のない範囲で始め、続けることが重要です。継続していくことで、しだいに寄付量も増えていきます。

食には、人と人をつなぐ力があります。昔は地縁や社縁、血縁といったつながりがセーフティーネットとして機能していましたが、今はそうしたつながりが希薄になっています。だからこそ、フードドライブや子ども食堂など、食を通じた活動によって人と人とのつながりをつくり、地域をつくり、セーフティーネットをつくっていくことが大切だと思います。

ＪＡのさまざまな取り組みが、地域課題に取り組む人をさらに増やすことにつながっていくといいなと思います。ぜひ、そういった意味でフードバンクとも積極的に連携していただけたらと期待しています。